

# 柳 宗悦の民芸論 (XXIX)

## － 雑誌『工藝』と日本民藝館 －

八 田 善 穂

分野：人文

キーワード：柳 宗悦、雑誌『工藝』、日本民藝館

目 次

- (1) 「雑誌『工藝』刊行趣意」
- (2) 主題一覧
- (3) 日本民藝館
- (4) 「日本民藝館の使命」
- (5) 付記・柳とモース

柳<sup>1)</sup>の多方面に互る活動の中でも、中心をなすものは昭和6年から24年まで続けられた雑誌『工藝』<sup>2)</sup>の発行と、昭和11年の日本民藝館<sup>3)</sup>の開設である。本稿はこの2つの活動を通して、柳の民芸論の輪郭をとらえようとするものである。

### (1) 「雑誌『工藝』刊行趣意」

以下は昭和5年の冬に発表された「刊行趣意」本文の全文である。

「長い間の懸案であった此雑誌が、刊行の機を得たに就いて、私達は此雑誌の特色を左に数へたい。

第一に此雑誌は工芸の領域を主題としてゐる。私達の考へでは造型美の世界では、今日迄寧ろ下積みになされてゐた工芸が、今後は一番重要視されると思へ

---

1) 柳宗悦 (1889 (明治22) - 1961 (昭和36))。

2) 発行所は第一号から第四十一号が聚楽社、第四十二号から日本民藝協会、第百十五号から靖文社、第百十八号が日本民藝協会會「工藝」編輯室、第百十九号と第百二十号が日本民藝協会となっている。発行日は一定せず、順序が前後する場合もある。

3) 東京・駒場。

るからである。ものが美しいと云ふ事と、工芸的であると云ふ事とは密接な関係が介在する。工芸性に触れずしては、美の問題を取り扱ふ事は出来ないと考へてゐる。まして社会意識の強まつてきた今日、工芸問題は今後益々注意の焦点となるであらう。

第二に私達は漫然と工芸を取り扱はうとするのではない。何が工芸中の本格なものであるかを吟味した結果、美からしても社会性からしても「民芸」が工芸の本流である事を解するに至つたのである。民芸とは民衆の日常生活に即する工芸を云ふのである。従つて此雑誌は工芸中の民芸を主要な題材とするのである。

それ故之は色々な工芸に対する雑多な論稿の集録ではない。筆者によつてもとより多少の相異はあらうが、全体からして一つの有機的な見方の提出とならう。従つて雑誌全体が殆ど共通な体験の記録であり信念の主張である。単に寄稿から成る雑誌では此事は不可能である。

取り扱ふ範囲は調度のみならず、家屋絵画等にも及ぶであらう。工芸美の問題や歴史はもとより、技法の記述や、新旧作品の紹介や挿絵による美の説明や、又は著書の批評や展覧会の吟味をも企てるであらう。又此雑誌の一つの仕事として講演や展観をも試みたい意向である。

私達はかゝる発言を抽象的ならしめない為、出来るだけ多くの挿絵によつて、具体的に私達が解して正しいとする美の標準を示すつもりである。そうして読者の直観に直接訴へたい希望である。此事に関して私達は特別な注意を払ふであらう。恐らく此雑誌に出る殆ど全ての挿絵は、読者には目新しいものであるに違ひない。目慣れたものでももう一度新しい意義を持ち来すであらう。

最後に私達は此雑誌それ自体を、事情の許す範囲に於て出来るだけ工芸的な作品として読者に贈りたい考へである。装幀とか版組みとか駒絵とか、それぞれに留意するつもりである。

原稿の責任者は左の六人であるが、私達は志を同じくする人々の寄稿をも得たいと望んでゐる。

昭和五年冬

富本憲吉  
河井寛次郎  
濱田庄司  
石丸重治  
青山二郎  
柳 宗悦<sup>4)</sup>

## （2）主題一覧

『工藝』は昭和6年1月に創刊され、昭和24年1月発行の第120号で終刊となった。各号毎に挿絵の主題を定め、解説と関連論稿が載せられた。主題の一覧は次の通りである。

- 第一号（昭和6年1月）石皿
- 第二号（昭和6年2月）民画
- 第三号（昭和6年3月）自在
- 第四号（昭和6年4月）看板
- 第五号（昭和6年5月）茶碗
- 第六号（昭和6年6月）丹波布
- 第七号（昭和6年7月）北九州の徳利
- 第八号（昭和6年8月）御厨子
- 第九号（昭和6年9月）陶器の文字
- 第十号（昭和6年10月）山陰の新作
- 第十一号（昭和6年11月）木工
- 第十二号（昭和6年12月）牛戸古陶磁
- 第十三号（昭和7年1月）李朝陶器
- 第十四号（昭和7年2月）こぎん

---

4) 筑摩書房版全集（以下「全集」と略記する）第20巻「編輯録」PP.57-58。なお、柳の著作は旧字体（正字体）、旧かなづかいによっているが、本稿では漢字のみ常用漢字に改めた（固有名詞、著作標題等を除く）。

- 第十五号 (昭和7年3月) 金工品  
第十六号 (昭和7年4月) 土瓶  
第十七号 (昭和7年5月) 絵馬  
第十八号 (昭和7年6月) 布志名窯  
第十九号 (昭和7年7月) 肥前染付猪口  
第二十号 (昭和7年8月) 緋  
第二一号 (昭和7年9月) 木喰仏  
第二二号 (昭和7年10月) 民窯  
第二三号 (昭和7年11月) 朝鮮石器  
第二四号 (昭和7年12月) 芹澤銈介型染  
第二五号 (昭和8年1月) スリップ・ウエア  
第二六号 (昭和8年2月) 漆器  
第二七号 (昭和8年3月) 茶碗  
第二八号 (昭和8年4月) 石州雲州和紙  
第二九号 (昭和8年4月) リーチ  
第三十号 (昭和8年6月) 籠細工  
第三一号 (昭和8年8月) 茶碗素描  
第三二号 (昭和8年9月) 倉敷の新作  
第三三号 (昭和8年10月) 肥前大鉢大皿  
第三四号 (昭和8年11月) 船簞笥  
第三五号 (昭和8年11月) 台所  
第三六号 (昭和8年12月) ダッチ・タイル  
第三七号 (昭和9年1月) 赤絵  
第三八号 (昭和9年2月) 外村・柳 (悦孝) の織物  
第三九号 (昭和9年2月) 民窯  
第四十号 (昭和9年3月) 朝鮮模様  
第四一号 (昭和9年5月) 苗代川窯

- 第四二号（昭和9年6月）金工品
- 第四三号（昭和9年7月）高取窯
- 第四四号（昭和9年8月）書物工芸
- 第四五号（昭和9年9月）赤絵
- 第四六号（昭和9年10月）リーチ素描
- 第四七号（昭和9年11月）日本の民芸
- 第四八号（昭和9年12月）瀬戸水滴
- 第四九号（昭和10年1月）琉球染織
- 第五十号（昭和10年2月）琉球紅型紙
- 第五一号（昭和10年3月）朝鮮藁工品
- 第五二号（昭和10年4月）船木の陶器、森永の織物
- 第五三号（昭和10年5月）河井・富本・濱田の陶器、芹澤の染物
- 第五四号（昭和10年6月）菓子型
- 第五五号（昭和10年7月）陶器
- 第五六号（昭和10年8月）朝鮮木工品
- 第五七号（昭和10年10月）楽浪彩篋
- 第五八号（昭和10年10月）硯
- 第五九号（昭和10年11月）武州紙
- 第六十号（昭和11年1月）三国荘
- 第六一号（昭和11年3月）染物
- 第六二号（昭和11年3月）染付小品
- 第六三号（昭和11年6月）築嶋絵巻
- 第六四号（昭和11年7月）植物染料
- 第六五号（昭和11年7月）野州石屋根
- 第六六号（昭和11年8月）絵漆
- 第六七号（昭和11年9月）茶碗
- 第六八号（昭和11年10月）河井陶器
- 第六九号（昭和11年12月）朝鮮現代民芸品

- 第七十号 (昭和11年10月) 日本民藝館  
第七一号 (昭和11年12月) 棟方志功「華巖譜」  
第七二号 (昭和12年1月) 行灯皿  
第七三号 (昭和12年2月) 泥絵  
第七四号 (昭和12年3月) 蓑  
第七五号 (昭和12年5月) 古陶器  
第七六号 (昭和12年6月) 芹澤「どんきほうて」  
第七七号 (昭和12年6月) 濱田の茶碗  
第七八号 (昭和12年8月) 文字  
第七九号 (昭和12年9月) 琉球の拓  
第八十号 (昭和12年9月) 朝鮮の陶画  
第八一号 (昭和12年11月) 柳の織物、棟方版画  
第八二号 (昭和13年3月) 朝鮮現在民芸品  
第八三号 (昭和13年1月) 古陶器  
第八四号 (昭和13年2月) ざぜち  
第八五号 (昭和13年3月) 李朝陶器  
第八六号 (昭和13年4月) 和時計  
第八七号 (昭和13年4月) 色染和紙  
第八八号 (昭和13年5月) 民間彫像  
第八九号 (昭和13年8月) 古丹波  
第九十号 (昭和13年9月) 支那影戯  
第九一号 (昭和13年9月) 米沢織物  
第九二号 (昭和13年10月) 鳥取民芸  
第九三号 (昭和14年2月) 宋胡録  
第九四号 (昭和14年3月) 南方支那染付  
第九五号 (昭和14年4月) 法然上人御影  
第九六号 (昭和14年5月) 川上澄生版画

- 第九七号 (昭和14年6月) 黄八丈  
第九八号 (昭和14年7月) 仏教版画  
第九九号 (昭和14年10月) 琉球陶器  
第百号 (昭和14年10月) 琉球風物  
第百一号 (昭和14年10月) 棟方版画  
第百二号 (昭和15年3月) 陸中漆器  
第百三号 (昭和15年10月) 首里と那覇  
第百四号 (昭和16年6月) 曾我屏風  
第百五号 (昭和16年10月) 支那陶画  
第百六号 (昭和16年12月) アイヌ織物  
第百七号 (昭和17年3月) アイヌ木工品  
第百八号 (昭和17年1月) 東北民芸  
第百九号 (昭和17年6月) 中世基督教芸術  
第百十号 (昭和17年7月) 日本民藝館  
第百十一号 (昭和17年10月) 李朝染付化粧具  
第百十二号 (昭和17年12月) 樺細工  
第百十三号 (昭和18年7月) 琉球てさあじ  
第百十四号 (昭和18年12月) 朝鮮紙  
第百十五号 (昭和21年12月) 三代沢本寿染紙  
第百十六号 (昭和22年3月) 芹澤染絵  
第百十七号 (昭和22年9月) 絵拵  
第百十八号 (昭和22年9号) 面  
第百十九号 (昭和23年7月) 沖縄陶器  
第百二十号 (昭和26年1月) 大津絵<sup>5)</sup>

---

5) 『マイクロフィルム版『工藝』『月刊民藝』目録 解題 総目次 執筆索引』ナダ書房、1985年刊、PP. 9 - 11。

### (3) 日本民藝館

日本民藝館の開設は昭和10年に倉敷の大原孫三郎<sup>6)</sup>から10万円の寄付を受けてのことであった。しかしこれより10年前の大正15年に、柳は「日本民藝美術館設立趣意書」を記している。「民藝」の話はこの中ではじめて使われた。以下はその中の「趣旨」の全文である。

「時充ちて、志を同じくする者集り、茲に「日本民藝美術館」の設計を計る。自然から産みなされた健康な素朴な活々した美を求めらるるなら、民藝Folk Artの世界に来ねばならぬ。私達は長らく美の本流がそこを貫いてゐるのを見守つて来た。併し不思議にも此世界は余りに日常の生活に交る為、却て普通なもの貧しいものとして、顧みを受けないでゐる。誰も今日迄その美を歴史に刻もうとは試みない。私達は埋もれたそれ等のものに対する私達の尽きない情愛を記念する為に茲に此美術館を建設する。

必然蒐集せられる作は、主として工藝Craftの領域に属する。それは親しく人の手によつて作られ、実生活の用具となつたものを指すのである。わけても民衆に用ゐられた日常の雑具である。それ故恐らく誰の目にも触れてゐる品々である。併し今日迄その驚くべき価値を反省した人は殆んどない。人々はかゝるものに如何なる美があるかをさへ評るであらう。併し此美術館の成就に於て、凡ての危惧は一掃せられるにちがひない。それは新しき美の世界の示現として、予期し得ない驚きを贈るであらう。

私達の選択は全く美を目標とする。私達が解して最も自然な健全な、それ故最も生命に充ちると信ずるもの、みを蒐集する。私達はかゝる世界に美の本質がある事を疑はない。従つて此美術館は雑多なる作品の聚集ではなく、新しき美の標的の具体的提示である。

私達はかゝる美が、寧ろ美術品と見做されてゐるものに少なく、却て雑具として考へられる所謂「下手」のものに多いのを見逃す事が出来ない。もとより美は至る處の世界に潜む。併し概して「上手」のものは繊弱に流れ、技巧に陥り、病疫に悩む。之に反し名無き工人によつて作られた下手のものに醜いもの

---

6) 1880 (明治13) - 1943 (明治18)。



は甚だ少ない。そこには殆んど作為の傷がない。自然であり無心であり、健康であり自由である。私達は必然私達の愛と驚きとを「下手もの」に見出さないわけにはゆかぬ。

のみならずそこにこそ純日本の世界がある。外来の手法に陥らず他国の模倣に終らず、凡ての美を故国の自然と血とから汲んで、民族の存在を鮮かに示した。恐らく美の世界に於て、日本が独創的日本たる事を最も著しく示してゐるのは、此「下手もの」の領域に於てであらう。私達は此美術館を日本に残す事に榮譽を感じないわけにはゆかぬ。

幸ひにも私達はそれ等の美を認識し得る時代に達した。又それ等の美を要求する時代に活きる。彼等は愛せられる為に、長い間私達を待つてゐた様にさへ考へられる。若し私達が今それ等のものを集めずば、凡てのものは注意される事なく失はれて行くであらう。何故ならそれは今日迄一般からも鑑賞家からも歴史家からも、省みを受けてゐないからである。同時に価値なく考へられてゐる為、今尚巷間に散在し、その市価はまだ極めて低廉である。而も日常の用具であつたから、数に於ても乏しくはない。私達は今此絶好の機会を捕へて、それ等のものを蒐集しようとするのである。

民藝の美には自然の美が活き国民の生命が映る。而も工藝の美は親しさの美であり潤ひの美である。凡てが作為に傷つき病弱に流れ情愛が涸死して来た今日、吾々は再び是等の正しい美を味ふ事に、感激を覚えなからうか。美が自然から発する時、美が民衆に交る時、そうしてそれが日常の友となる時、それを正しい時代であると誰か云ひ得ないであらう。私達は過去に於てそれがあつた事を示し、未来に於てもあり得べき事を示す為に、此「日本民藝美術館」の仕事を出発させる。

大正十五年四月一日

富本憲吉

河井寛次

濱田庄司

柳 宗悦」

7)

この時期には名称が「日本民藝美術館」となっているが、開館の際には「日本民藝館」に変っている。「美術」と「工芸」の違いを明確にしようとする意図によるものであろう。しかし実際には現在、『全国美術館ガイド』<sup>8)</sup>にも、あるいは『歴史博物館総覧』<sup>9)</sup>にも「日本民藝館」は掲載されている。さらには、『全国民俗博物館総覧』<sup>10)</sup>にも載っている。かつて拙稿において述べた通り<sup>11)</sup>、民芸の立場は民俗学の立場とは異なっている。それでも『総覧』に「日本民藝館」が含まれているのは、民俗学の立場からも、その存在が無視できないことを示すものであろう。『総覧』の「はしがき」には次のように記されている。

「これを編集・刊行するゆえんのもの、これによって各地の民俗資料収蔵施設が、ただに民俗文化財として地元住民の利用にとどまるものでなく、ひろく全国に周知されて全国民の利用に役立つこと、ことに民俗学者その他専門研究家はこれによってはじめて民俗資料の全国的比較研究が可能となり、一般国民はこれら各地の民俗資料を観光・見学することによってその土地土地への理解を深め、日本文化の源泉にふれることになると考えられたからである。」<sup>12)</sup>

#### (4) 「日本民藝館の使命」

2008年、日本民藝館の監修・編集により、『日本民藝館手帖』<sup>13)</sup>が刊行された。その冒頭に柳の「日本民藝館の使命」<sup>14)</sup>が掲載されている。これは日本民

7) 全集第16巻「日本民藝館」、PP. 5 - 7。

8) 美術出版社刊。

9) 新人物往来社刊。

10) 柏書房、1977年刊(以下『総覧』と略記する)。なお、同書では「日本民芸館」の欄に「内容」として、「民芸館は、民芸運動本来の目的から、民衆的工芸品の持ついきいきとした生命のあるもの、またたとえ美術品であってもこの要素を持つ品物を美の基準として収集展示している。このため、展示は、もの自身的美しさを見せるために一般の美術館、民俗資料館等と異なり、解説や説明等をはぶいている。(後略)」と記されている。

11) 「柳宗悦の民芸論(V)」(徳山大学経済学会論叢、第28号、1987年12月)、「同(XI)」(徳山大学論叢、第34号、1990年12月)(拙著『柳宗悦研究—民芸の美学—』(徳山大学研究叢書25、平成14年)に収録)他。

12) 『総覧』、P. 2。

13) ダイアモンド社刊。

14) 初出『博物館研究』第十巻第六号、日本博物館協会、昭和12年6月。全集第16巻収録。

藝館の開館直後のものであるが、70年以上経た今日もなお、新鮮さが失われていない。以下がその全文である。

「この民藝館は美しい品物だけを列べようとしております。ものの存在価値は美的本質によるのであって、他の要素はこれに比べては二次的なものと考えられます。

それではどんな美が最も正しい美であるか。

私達は健康な美、尋常な美の価値を重く見たいのであってかかる美が最も豊かに民藝品に示されていることを指摘したいのであります。

民藝とは民衆的工芸の謂でありますいいが、私共は無名の職人達が民衆生活のために作った各種の実用品の中に、最も正当な美しい工芸の発達を見ております。元来美と生活、美と民衆とには深い血縁が結ばれておりながら、いままでこのことが充分に理解されておりました。それゆえ美術館が民藝館であることに私共は特別な意義を感じる者です。

瑞典スウェーデンなどには立派な民俗博物館があります。がそこでは雑多な物を多数並べるため、しばしば醜いものさえ中に加わるのです。同じことが従来の美術館にも言われると思います。それは美的価値よりも、時として由緒を重んじ、あるいは在銘に捉われ、あるいは技巧にこだわり、あるいは種類に滞る等、その結果玉石混合し、美的統一を失ってしまいます。

そうした冷たいただの陳列所からはっきり区別されるのが、民藝館のもつ最も大きな特色の一つとなるであります。一貫した美の目標のもとに、個々の品物をまた全体を整理して行く、かかる仕事こそ、誰よりも日本人に一番きざ応おしい仕事ではないでしょうか。

この民藝館がもつ品物は多く徳川時代のものですが、それは時代が近いために多く保存されており蒐集しやすいという意味ばかりでなく、この時代において一番民藝が発達したと見られるからであります。鎖国によって外国の影響を受けることなく、純粋に日本的なものが創造されました。この時代において日本人がいかに美しいものを生み出すことにすぐれているかがうかが窺かわれるのであります。

わが民藝館では古作物を愛すると同時に、<sup>もてあそ</sup>遊びに墮することを戒めております。過去への愛は将来への備えに転ぜねばなりません。美の標準を示しその法則を学ぶのは、それによって未来に新しい作物を生むためではないでしょうか、その意味でこの民藝館の仕事は古作品への正しい認識から、新作品の正しい発展へと進み、正しい工芸の健全な成長のために尽くすことを念願と致すものであります。<sup>15)</sup>」

### (5) 付記・柳とモース

拙稿「柳宗悦の民芸論 (XXIII)」<sup>16)</sup> および「同 (XXVII)」<sup>17)</sup> において取り上げたモース<sup>18)</sup> のコレクションについて、柳は「漫談一東」<sup>19)</sup> の中でもふれている。ここではモースに対するある程度の積極的な評価が見られるので、以下にその部分を追補する。

「甚だ不思議であるが、日本の焼物の研究は、日本だけでは今の所まだ不便である。沢山の種類を系統的に陳列してある美術館は一つもないし、個人の所蔵は中々見られない。早く何とかしたいものと常に思ふ。そこへ行くと米国の方が今の所では遥かによい。一番優れてゐるのはモルスの蒐集で今ボストン美術館にある。その出店の格でセーラムにもピーボディ美術館があつて、中々沢山有つてゐる。紐育<sup>20)</sup> のメトロポリタンにも多少あるが、ボストンについてゐるのは華府<sup>21)</sup> のフリーア―陳列所<sup>22)</sup> である。之れ等のものを歴訪すれば、日本のどこへ行くよりも一時に沢山見られる。羨ましい事は外国人が自分の蒐集品を私しない事である。そうして兎も角研究を相当にまとめて了ふ事である。

15) 『日本民藝館手帖』、PP. 2 - 3。

16) 徳山大学論叢、第64号、2007年3月。

17) 同、第68号、2009年6月。

18) Edward Sylvester Morse (1838 - 1925)。

19) 『茶わん』創刊号(昭和6年3月1日発行)に寄稿、全集第16巻収録。

20) ニューヨーク。

21) ワシントン。

22) Smithsonian Institution, Freer Gallery of Art, Charles Freer (1856 - 1919) の創設になる東洋美術専門の美術館。

中でもモルスの目録は一番完備してゐる。

モルスの蒐集は目録に番号を付してあるもの総じて五千三百廿四点であるが、それ以外のものが中々多いから、世界中で日本の焼物の研究には一番有益な資料である。・・・もとより私の興味の中心はその中の民芸品であつたが、とりわけ朝鮮系のものに留意した。此朝鮮系のもは前述のフリーアーにもかなり多く色々な知識を得る事が出来た。・・・

尤もモルスの蒐集は、その蒐集の焦点が私の理想としてゐるものとはかなりの差違がある為、興味をそゝるものは割からすると甚だ少ない。モルスは学者であつたが、眼は全くきかなかつた人と思ふ。来朝したのは明治も早い頃であるから、もつとい、材料がたやすく手に入つたであらうが、玉石の見わけがないので、美的価値の側から云ふと案外貧しい蒐集とも云へる。そこへゆくとフリーアーの方が遥かに見えた人の様に思ふ。併し何と云つてもモルスの方は数が多いので中々の優品が交り、それ等のもの、為に度々足を運んだ。

モルス蒐集中の九州もの、特に朝鮮系のもものでは何と云つても象嵌の種類が一番多い。此の手法は余程日本人の嗜好に適したものか、窯の数はかなり多く又分布区域も相当広い。もとより九州以外の地例へば京窯や瀬戸にもある事は周知の事実である。前述の様にモルスの目録は中々苦心の作品であるが、やはり古窯の実地調査が殆どなく、在銘を頼りに研究していったので、無銘品特に民芸品の叙述は極めて杜撰である。之は在来の学問の共通の欠点とも云へよう。それ故西洋人であつた著者を責めるのは酷かも知れない。併し発掘品で分る通り、朝鮮系の焼物の大部分は実に無銘品であり、又私の経験からしてもそれ等無銘品の方が美的価値が遥かに大きい。それ故私達は在来の官学的な見方を捨て、新しい立場をとつてそれ等のものを研究し鑑賞する事が一番緊要だと思ふ。こゝに「官学的」と云ふのは在銘に頼り個人的作をのみ大事にする見方である。若しモルスが此欠点を知つてゐたら、彼の蒐集は更に拡大されてゐた事と思ふ」<sup>23)</sup>

---

23) 全集第16巻、PP.711 - 712。